

COFFEE BREAK

タイトル今昔物語

三 和 康 太 郎

(1984年3月22日 受理)

An Essay on the Titles of Articles and Others

Kōtarō MIWA

(Received March 22, 1984)

題名というものは、作物中もっとも大切な顔であるにちがいない。教科書、学術論文や、小説、映画に至るまで、まずタイトルを眺めてから、次に内容を見るかどうかが決まる。例外は、審査員とか指導教官くらいのものではあるまいか。

顔である以上、一件ずつ異なっているのが本来のはずだ。しかし時として同一題名が存在する。小説の場合は、作者が意識して、故意にあるいは止むを得ず、先人と同じタイトルを採用することがある。「女の一生」、「完全犯罪」などが、著名例として知られている。一方、教科書・学術書になると、意識してもしなくても、「固体物理学」、「高分子物性」等々のように、誰が書いても同じような題名になってしまう。無理にオリジナリティーを出そうとすると、意味不明もしくは長たらしいタイトルが生じるだろう。

ある理工系出版社の話によると、「有機材料工学」のような6字題名の本が望ましいそうだ。それより長いと売行に影響するらしい。もっとも6字だから売れるとは限らぬ。私自身20年近く前に6字名の教科書を書いたけれども、書評に反して、ちっとも売れず、徒に<幻の名作>と化してしまった。そんな例もある。

小説では、タイトルの制約は少ない。性格上当然のことだ。1字のもの、谷崎や横光利一が多用した2字題名の作品から、ヘミングウェイ、高見順、大江健三郎らの長い題名の本に至るまで、多種多様である。理工系だったら、長題目派の本はまず売れまい。それでも大勢の読者に買わせることのできる彼らの個性や実力は、見事なもの、というべきである。

学術論文の場合の事情は、多少これとは違って来る。タイトルは長くても短かくても、とくに差支えはない。「蛍光体の研究」、「セメントの水和反応」のような短文のタイトルがある。一方「団栗のスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶ」、「歴史的なるものの存在性格

より見たる法的規範の限界性に就て」などは、比較的長い例だろう。後者は私の親戚の法学者の昭和初期の論文である。

全般的傾向としては、時代と共に、タイトルの長い論文が多くなって来たような気はする。昔は研究者の数や研究テーマそのものが少なかった。ゆえに短文タイトルも妥当であった。ところが先人より前へ進むべく勢い細緻化ないし重箱のすみのようになって来る。長タイトル化も自然の成行だろう。これは学会や読者にとって有難い傾向とはいえないのだ。

そこで冗文句をなるべく削りたい。「研究」である以上、「に関する」に決まっている。「Japanese Paper Trash に関する研究」の「に関する研究」を取ってしまえばよい。現在では、学位論文とか学会表彰論文のような総合的表題においてのみ、「に関する研究」が残留しているに過ぎぬであろう。

タイトルを考えるのに、存外苦労することがある。論文内容を、誇大ではなしに適確に表現しようと、さんざん考えたすえ、「酸化ガラスの構造と性質」といった当りさわりのない題に落着く。だから全く別の研究室から、同じ題名の作品が学会に提出されることも、希ではない。

自分の研究室の中でも、長年の同じテーマの下に、毎年学会で発表をする際、既論文と少し字句を変えて題を決めるような配慮も必要になる。前の題名を忘れて全く同一のタイトルを付けたりすると、自他共に混乱を引き起こすのである。もっとも第三者はくあいつらはどうせ変りばえしないことをやってる>と思うだろうから、文書の苦心もさして役に立たぬかも知れない。

雑誌の記事とか新書版啓蒙書では、人眼を引くために羊頭狗肉的表現を採用する。広告を見て買った週刊誌が100%期待外れに終るゆえんだらう。学術論文ともなると、あまり突飛な表現も、実際には出しにくい。表現のパターンが定型化せざるを得ないのだ。例えば「AのB」、「AのBとC」、「AのBに及ぼすCの影響」などが挙げられる。

「AのBとC」を国際誌に投稿する折は、「B and C of A」となろう。[(B and C) of A]の意味であるけれど、[B and (C of A)]と区別するために、人によっては「B of A and its C」とする。「その」が目ざわりの時もある。敗戦数年後の頃<□□とその楽団>といったものがボウフラのように発生したのを、思い出すからである。

「電磁気学の理論と応用」、「日本資本主義の成立と展開」は、「AのBとC」に属する。小説の方でも、一例

を示すと「紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見」がある。後年輩出した「某々の生活と意見」の原型になった「The Life and Opinions」というタイトルを創案したスターンに脱帽したい。本来ならすぐれたタイトルの発見者には、特許権が与えられてしかるべきものであろう、と思う。

さて私などの経験でも、論文のときに「影響」、「作用」、「役割」を、よく使った。世間一般でも多いようだ。「Effect of Ultra-violet Ray on Electromotive Action of Frog's Eyes」等々。「影響」の便利な点は、そう名付けておけば、結論がどう転んでも一向に困らぬ、という事情にある。非凡なる研究者においては、使わなくても済むであろう。

文学関係だと、同じ「影響」でも心理的あるいは個人的要因が入るので、「誰々のゲーテ受容」といった高尚な表現を探る折も多いにしても、平たくいえば、これも「影響」に他ならない。むしろ「影響」や「役割」にふさわしい論文もあって良い。「丹羽文雄における菜の花の役割」などの文学論文を物することは可能だろう。

とくに文学方面の論文には、「研究序説」というのが多い。「ドストエフスキー研究序説」のたぐいである。もっとも文学などは常に「序説」に止まるのであって、「本説」とか「本論」はそもそも成立しないのである。

理工系では、少なくとも昔は「本論」があった。片山正夫の「化学本論」は、その名に恥じぬ記念碑的大作である。宮澤賢治の愛読書でもあった。私も学生時代に教室の図書室で見たことがある。

ひるがえって1980年代の人間ともなれば、「〇〇学本論」を書くことはできまい。仮りに誰かが書いたら、〈思い上りだ〉、〈頭がオカシイのでは〉などの、猛然たる非難が、大先生方によって浴びせられるだろう。

「AのB」などは最も簡潔なタイトルだ。「首縊りの力学」、「モリエールのドラマツルギー」、「戦後日本の経済発展」等の意味は、よく判る。小説の場合は、題名が一般的に極度に圧縮され、また象徴的になるため、時として「の」意味が不明確なことがある。タイトルのみを眺めると、松本清張作品の「AのB」にはこれが多い。「砂の器」は〈砂を入れる器〉か〈砂で出来た器〉かが判らぬだろう。英文にすると、必ずしも「of」ではないから、はっきりするのではあるまいか。

論文題名の用語にも、時代を反映した流行語が見られるのである。1970年代には「キャラクターゼーション」がはやり、「何々のキャラクターゼーション」が頻出し

た。ただし人によって意味がまちまちである。ある人は〈structure and composition〉に限定し、propertyを入れない。別の者は、「構造と性質」のタイトルに示されるように、propertiesまでを含めた。最もいい加減な例としては、要するに何かしらやることをもって「characterization」の看板とした向きも、なくはなかった。

1980年代の今は、「機能性」である。「機能性」でさえあれば助成金がもらえる現状であってみれば、タイトルに多用されるのも当然といえよう。「ファイン」も同様だ。「ファインセラミックス」は流行語になっている。「ファイン」と「ニュー」とは同質ではない。

「ニュー」、「ウルトラ」、「スーパー何々」などは、俗称としては差支えなからうものの、本当は適切語ではない。さらに新規のものとか、より高性能の製品が開発された時、どうするのか。まさかスーパーウルトラCなどと号する訳にもゆかぬだろう。

一連のシリーズの大研究には、各報ごとにサブタイトルの付くのが普通である。「高分子合成の研究(第36報) AとBの反応」といったスタイルである。昔はこれが多かった。しかし最近の学会の多くは、「第何報」形式を許可しないので、大きい題目のほうが逆にサブタイトルになって来ている。

何10報もある場合、最初から構想を立てて、その通りの順序で発表して行くなどは、まず不可能であろう。推理小説のストーリーの組立てとは訳がちがう。計画どおりに論文が進むようなら、そんな研究自体、必要がなさそうである。そうかといって、行き当たりばったりの思い付きで、報数が月日と共に増加し、飽きた処で打ち切りにするのも、あまり誉めたことではない。元素の種類や組合せを変えれば幾らでも続報が書ける、なぞの例も、一種の論文公害に他ならぬだろう。また内容の種別には全くお構いなしに「A大学B教室発表論文第n報」と銘打った馬鹿げた事例に、以前お目にかかったこともあった。

「第n報」では、何となく希釈物を見せられている感もなくはなからう。他人の研究の生々しい歴史を時間的経過を追って学ぶ際には、便利ということはある。反面、著者の意図が第三者へ十分に伝わりにくい欠点も生じる。もっとも、むやみに他人にネタを提供するのも損であるから、わざと意図の判らぬように書くのかも知れない。

世の中の繁忙度がますます大になっている際でもあり、簡潔な一編の力作として論文を提出してもらおうが、自他ともに好都合であろう。